十七歳の不在

第三章

八月十七日

この日、三鷹駅周辺では、浴衣や法被を着た踊り手の姿を多く目にする。

また、警官の数も多い。

三鷹市では今年でもうすぐ六十回目を数える阿波踊りのイベントがあり、三鷹駅前も観客や住民の混雑が予想される。

　広美の伯母が三鷹に住んでおり、このイベントに踊り手として参加する。広美は伯母から誘いを受け、部活が終わり次第、見学に行くことを伝えていた。

「久しぶり。焼けた？」

　冷房の効く合唱部の部室に、レイが顔を出す。

「焼けたかな。結局、海とか行ってないから。部活の登校焼け」

　厳密に登校とつけるのが、選子の返事らしい。

「レイは、あんまり焼けてなさそうけど。なんか別の夜遊びを覚えたって」

合唱部で使用している楽譜を確認しながら、広美も返答する。

「ねえ、今忙しくないなら、この場で見てほしいものがあるんだけど。」

「オフ会の戦利品か何か？いろいろ想定できすぎて、一体何を見せられるのやら」

　両手を胸の辺りで組みながら、選子が言う。

「こっちは、ちゃちゃっと片付けてさ、今日はお祭りだし、雰囲気だけでも楽しも」

　口から出てきた言葉は頼もしさがあったが、広美の顔は笑っていなかった。

【投票用紙は、アナタを守るいろいろなモノになる。かもしれない】

【日本で直面すること】

１【感染症。マスク】

２【地震。ヘルメット】

３【武士道。刀】

４【少子化。投票カフェ】

５【核。核シェルター】

「これで終わり？」

　渡されたメモを見て、選子が尋ねる。

「若干、要約というか簡潔に。ほぼ、モモコさん発信、モモコさん作です」

「もしかして、予言みたいなこと？」

　謎解きクイズの暗号を解こうとするように、広美が尋ねる。

「ううん。また日本で感染症が流行する、という意味ではないです」

「少し、ヒントをください」

　広美と顔を見合わせながら、選子が言う。

「感染症が流行するというリスクがある日本で、投票用紙はマスクになります」

淀みなく、一息でレイが答える。

「なんか、今のはわりと、というか、かなり腑に落ちたけど」

首肯しながら、広美はそう返事をして、それから選子の様子をうかがう。

「うーん、あたしも、今のは理解できた気がする」

「そう？それなら、残り四つも同じ文型というか、同じ文法で解釈できるかも。残り四つを宿題にしてよければ、もうここからは、阿波踊りの見学の時間にできるよ」

両腕だけ踊るふりをしながら、レイが笑顔を見せる。

「まだ午後の一時だし、涼みがてら、もう少し、三人でこの謎に挑もうよ」

団扇を扇ぐ仕草をしながら、広美がレイにそう言った。

「そしたら、二つ目のヤツ、広美さん、淀みなく、どうぞー」

二問目の二をピースで表して、レイが答える。

「地震が頻発するというリスクがある日本で、投票用紙はヘルメットになります」

カンペを見ているかのように、すらすらと、広美が言った。

先月末に、カムチャツカでマグニチュード8.8の地震が発生したばかりだ。日本国内でも、震源に近い地域の人は、すぐに高台へ避難している様子が、ニュースになっていた。

「地震が頻発するというリスクがある日本で、投票用紙は高台になります」

その地震を覚えていたのか、レイも一部分だけ言葉を変えて、再び口にする。

選挙といえば、どの党が勝つとか負けるとか、誰が当選すると落選するとか、投票からイメージとしてつながるのは、そういった政党とか議員を選択するという、それで間違えていない。それ以上でも、それ以下でもない。

しかし、いざ、この間の地震が起きたことを考えてみると、何か有事の際には、私を、私たちを、国民を守ってくれる高台が無ければ、津波に流されて、命を落とす。

「三つ目も、三人で考えれば、分かると思うんだけど」

初めの二問の回答が気にいったのか、選子が先を促す。

「はい、三つ目、選子さん、お願いします」

「武士道精神が称賛される日本で、投票用紙は刀になります」

　今までと同様の型に合うように、選子が答える。

「武士道精神発祥の地である日本で、投票用紙は武士の帯刀する日本刀になります」

「男気」や「漢気」という概念が好きな人は、一定数、存在する。それと、日本古来より伝わる「武士道」の精神を結びつけることで、「男気」と同時に日本人としての在り方も、問われ続ける。そして、その先には、その人には、日本刀の帯刀が許される。

「私は、武士道とか、少し考えてみたけど。思い浮かんだのは『武士は食わねど高楊枝』ぐらいだったんだけど」

頼りなさそうな声で、レイが言った。

「何それ？タカヨウジって、爪楊枝のこと？」

そう言って、広美は『武士は食わねど高楊枝』をスマホで調べる。

「お腹が空いてても、食べたふりして、爪楊枝をくわえる、の意」

広美が調べた結果を、選子とレイに見せる。

「プライドとか、見栄っぱりってこと？」

男子特有の感情かなと思いつつ、選子が答える。

「清貧とか、体裁を保つって、伝えてくれた方が、こっちも支えたいってなるよね」

　先ほどの慣用句の意味や背景なども調べた上で、広美が応じる。

「これさ、念のため、男性に聞いてみた方がよくない？」

　レイは、頭の中で言葉としては想像できた部分もあったが、当事者の意見は重要だろうと考えた。

「レイの言う通りだね。でも、誰に？どこからどこまで説明する？」

「聞く相手とか、聞き方とか、注意しないと、怒らせちゃったりして」

広美と選子と、順に返事をもらい、レイはある人を思い浮かべる。

「待って。最近、武士とか侍が出てくる良い映画を観たって言ってた人、思い出した」

「じゃあ、その人で決まりってことで」

「女性なんだけど、まあいっか」

「ねえ、もう三時だよ。ちょっと休憩しよう。四つ目と五つ目も、三人でいるときに考えようよ」

　そう言った広美の表情は疲れて見えるが、口調には明るさが感じられた。

「一人は荷物の番してさ。トイレ行ったりお茶買ったり。でも、平気か、別に盗まれないか」

「いや、選子の言う通り。三人いるんだから、順繰りにしよ」

　広美と選子が席を立つ。

レイが中庭を見ると、誰の姿も見えなくなっていた。

十分と経たずに二人が戻ってきたが、選子は手にアイスを持っている。

二人と入れ替わりに、レイが席を立つ。

レイがトイレから戻ると、今度は広美だけが席を外していた。

「アイス、どうしたの？」

「部活の笹川先生から。今ここで私たちがやってることを言ったら、皆で食えって」

「同じぐらい、部活もガンバレって言われたんでしょ？」

席に戻りながら、広美も続けて答えた。

「でも、笹川って怖い厳しいイメージしかない」

選子からアイスのカップを受け取りながらも、レイはストレートに言う。

「ま、生徒になめられないようにとか、いろいろあるんじゃない？」

レイへの同調でない、広美の返事に、レイは驚きを隠せない。

「怖さを演じているって、こと？」

「演じてるかは知らないけど。アイスはくれた」

　広美も選子も、ゆるぎない。

おそらく、笹川先生に対する認識は広美や選子の方が正しく、私は誤解をしていると、レイは心の中で思う。

「私、誤解を改めないと、だね」

「大丈夫？動揺してない？」

　レイの微妙な心理の変化に気づいたのは、広美だった。

「うん、ちょっと」

「この後、続きができるかなと思って」

「ありがとう。始めよう」

「避けて通れない少子化に直面する日本で、投票表紙は投票カフェになります」

四つ目のフレーズを言ったのは、選子だった。

「『投票カフェ』って、あるの？」

　この質問を口にしたのは、レイだった。

「サッカーを観戦するカフェとか、スポーツ系は都内とか都心だったら、かなり増えていると思う」

　それに素早く回答したのは、広美だった。

「日本って、政治の話って、人前であんまりしちゃいけないって、前におじいちゃんに言われたんだよね。ずっとそういう文化でやってきているって」

　言われたの、いつだったっけなと、考えながら選子が言った。

「どの先生だったか忘れちゃったけど、私も聞いたことがある。政治とか宗教の話って、雑談のうちは平和だけど、遅かれ早かれトラブルにつながる可能性を秘めている。だから、社会に出たら、天気の話とか、その日テレビで映っているニュースの話ぐらいになるって」

 カバンから現代社会の教科書を出しながら、広美がそう言う。

「少子化問題ってかなり難しいって、おじいちゃん、言ってた気がする」

広美が広げた教科書をのぞきこみながら、選子が続ける。

「選挙と婚活を兼ねるっていう発想？例えば、花火大会だったら、男女ペアで参加しても不自然じゃないよね？選挙も同様に男女ペアで参加してみては？ノリとしては、そういうこと？」

　レイがようやく半歩、話を進める。

「日本に馴染むかな。でも、とにかく私たちなりの回答は得られたかも」

　導き出された回答を、選子は素直に受け入れる。

「待って。関係ないことを、掛け算」

　今度は独り言のように、広美が話し始める。

「この四つ目だけ、どう考えても、二つの言葉が無関係って感じがしない？でも、着地としては飛躍した回答が得られてる。錬金とか錬成、みたいな」

「その上、広美ってそういう仕事、向いてるんじゃない？ってことにも辿り着けた」

「私が錬金？錬成？レイ、ありがとう」

「すまん、今日は五つ目に進むけど」

いつも言わない言葉を使うレイが、自身で照れている。

「核の使用を検討する日本で　投票用紙は核シェルターになります」

今までの文法に即して、選子が言う。

「核武装などに関する議論も、日本の喫緊の課題だと、おじいちゃんが言ってました」

自分のカバンから教科書を出して、選子が続けて言った。

「でも、日本は非核三原則があるから、検討の余地なく、核を用いることはありません」

　広美とレイをゆっくりと順番に見ながら、また選子が言った。

「私、ここで、天の助けを、使おうと思うんだが」

　そう言って立ち上がるレイの、右手にはスマホが握られている。

「分かった、誰かに電話するんだ？私たちだって、助けてもらっていいよね？」

親指を立ててグーを握りつつ、広美が笑顔で言う。

「モモコさんです。もともと、いつでも連絡をちょうだいって言われてて。おそらく、土曜の午後辺りに三人で集まるからって伝えたら、土曜だったら私も休みだから、電話でもラインでも遠慮なくって」

「そうだったんだ。じゃあ天の助けというより、進捗報告だね」

　レイの持つスマホに視線を投げつつ、広美が言う。

「あ、モモコさん。こんにちは。五つ目まで進んでます」

レイは、新しいメモ用紙に二つの言葉を書く。

【核と核シェルターは、最強の矛と最強の盾か】

【最低限、思考を止めないという意思かしら】

「五つ目に関して、参考になりそうな文章はこれくらいだって」

　後で全部のデータを広美と選子に送りますと、レイがつぶやく。

「最強の矛と最強の盾って、何の授業で出てきたっけ？」

　そう言って、広美が、今度は国語の教科書をカバンから出す。

「この矛と盾の話の場合、結局、どうなったんだっけ？」

「矛も盾も、壊れちゃった」

レイのスマホから、モモコが答える。

「そしたら、核には核シェルターで立ち向かえば、相打ちにはできるのかな」

　モモコにも聞こえるよう、大きな声で、広美が言う。

「もし、仮に、核兵器がかなりヤバい兵器だったとして。気分的には、それを抑え込めるものも同時に開発を進めるぐらいのことをしないと、マズいんじゃないかな。気分的には。良心的には。人道的には。そこんとこ、ヨロシク！」

再び、レイのスマホから、モモコが答える。

「そういった色々なことについて、思考を止めない意思表示が必要だと」

　モモコからの、聞きなれない言い回しに、広美はつい笑いながら応じる。

「ためらい続ける。考え続ける。何事も、続けることは、とても難しいけど」

モモコはここまで話すと、スマホの電話を切った。

「やったー。今日はさ、踊ろうよ」

　レイから渡されたメモを早くも四つ折りにしつつ、広美が笑顔を見せる。

「やったー。阿波踊り、エアで参加しよう」

　広美に合わせてメモをたたみ、カバンを片付けながら、選子も笑顔を見せる。

「見て、暮れかけの空がキレイ」

向かった窓から見えた景色を見ながら、レイもそう言って笑顔を見せた。